

2013.10.26 [SAT]
PM3:00-

●誰が最初にサンカというコトバを使ったのか、断定はできない。ただ、そのコトバを巷間に広めたひとりに柳田国男がいることは間違いない。柳田国男の漂泊民への関心の深まりは1911年（明治44年）に、南方熊楠宛の書簡に出てくる、イタカ、カハタ、サンカの語を使用して以降のようだ。

●柳田国男は、さまざまな職業の普通人の体験と知恵を土台骨として、民俗学をうちたてた人である。普通人の暮らしを学問の対象に据えたことは画期的な試みであったことには違いない。学問が、一部の知識階級の専有物であったことへの反省から、「常民の学問」を説いたわけだが、その資料収集法は、下部から上層部への上奏に近い。農政官僚の柳田を迎える地方役人は袴を羽織って出迎えている。

●その情報は、柳田国男の透徹した分析力によって、次々と論文として発表される。その論は絶大であり、やがてバイブルと化す。権威付けられた「サンカ」のコトバが一人歩きを始める。箕直であろうと、箕作りの民であろうと、すべてがサンカの一族ということになりかねない。三角寛の『サンカ社会の研究』（1965）の出版が、そうした動きに拍車をかけた。また、警察用語としても「サンカ」は特別な意味をもつようになりしむけられた。

●そうしたお膳立てが整えられた上で、九州山地の、旧蘇陽町（現、山都町）の滝下がサンカ集落として捏造されていった。その地に明治以降に、隣村の諸塚村字七ツ山の農家の二、三男が、世活の安定を求めて住み着いているが、かれらこそ、サンカの源流からの流出民であると、決めつけられ、民俗学のセンセイが学生を引き連れて“源流調査”に入ってくるようになった。七ツ山にも滝下にもサンカというコトバはない、ということを考えもしない。

……「サンカ」と称されたある集落をめぐり、民俗学が連綿と創りあげてきた虚像を、地を這う緻密な調査によって打ち砕く。

話し手

稲垣尚友（竹大工・民俗研究家）

虚像サンカ



会費

カンパ制（任意）

場所

ギャラリー GALA

世田谷区梅ヶ丘 1-26-5-2F（小田急線梅ヶ丘駅南口徒歩1分）

<http://www.gala-fudoki.com/>

参加連絡

090-4713-1299（稲垣一雄）

080-5085-2477（橋爪太作）

info@tokarajuku.sakura.ne.jp

主催

文化結社トカラ塾 (<http://www.tokarajuku.sakura.ne.jp/>)

